

日本学術会議主催 学術フォーラムに登壇しました（2022/7/7）

テーマ：国難級災害を乗り越えるためのレジリエンス確保のあり方
会場：日本学術会議講堂、東京都

令和4年7月7日（木）に、日本学術会議が主催し土木工学・建築学委員会 IRDR 分科会が共催する学術フォーラム「国難級災害を乗り越えるためのレジリエンス確保のあり方」において、災害医療国際協力学分野の江川新一教授が発表者およびパネリストとして登壇しました。

このフォーラムは、21世紀前半に発生が確実視される超巨大災害を乗り越えるために、関連するさまざまな学術分野の知見を統合し、残された時間の中で何をすべきか、発災後に何をすべきかについて、今期中の学術会議からの提言の検討に向けて、学術の知見から国難級災害を乗り越える俯瞰的な戦略と実行可能な具体的方策を考えるために開催されたものです。東北大学災害科学国際研究所も参加する防災減災連携研究ハブ Japan Hub of Disaster Resilience Partners (JHoP) が後援しています。

フォーラムの主旨説明ののち、①レジリエンスを知る、②どんなことが起きるのか、③どんな備えがなされているのか～ハードとソフトでの維持からスマートへ～、④国難級災害を乗り越えるとはどんなことか～こわれない仕組みとは何か～、⑤そのために何をすべきか～柔軟さとしなやかさ～、という5つのテーマにおいて登壇者が発表し、後半に会場・オンラインの参加者との質疑応答を含むパネルディスカッションが開催されました。

江川新一教授は「ウェルビーイング：ひとりひとりがこわれない」というタイトルで講演し、災害リスクと防災の考え方、阪神淡路大震災で確立され、東日本大震災を経て深化し、ASEAN 各国で標準化のモデルとなっているわが国の災害医療体制について説明し、災害のリスクと平均寿命が逆相関することの理由を説明しながら、ひとりひとりがもつ価値観ともいえるウェルビーイングを達成することと防災が相反するものではなく、むしろ防災への投資はウェルビーイングへの投資でもあるべきだと強調しました。

参加者の質問に各パネリストが応える形でさらに議論は深められ、国難級災害という概念をどのように発信していくか、災害リスクを減らしよりよく復興することにより、しなやかに災害を乗り越えるレジリエンスを向上させるために、現在の人口減少社会、世界情勢、経済情勢などを踏まえながらどのようなことが実現可能かをさぐる、大変興味深いパネルディスカッションとなりました。

防災科学技術研究所をはじめとして、防災減災連携ハブの様々な方々と対面で議論を進めることが久しぶりに行われ、今後の研究連携、実務連携を多面的に進めるためのよいアイデアが得られました。

文責：江川新一（災害医療国際協力学分野）
（次頁へつづく）

